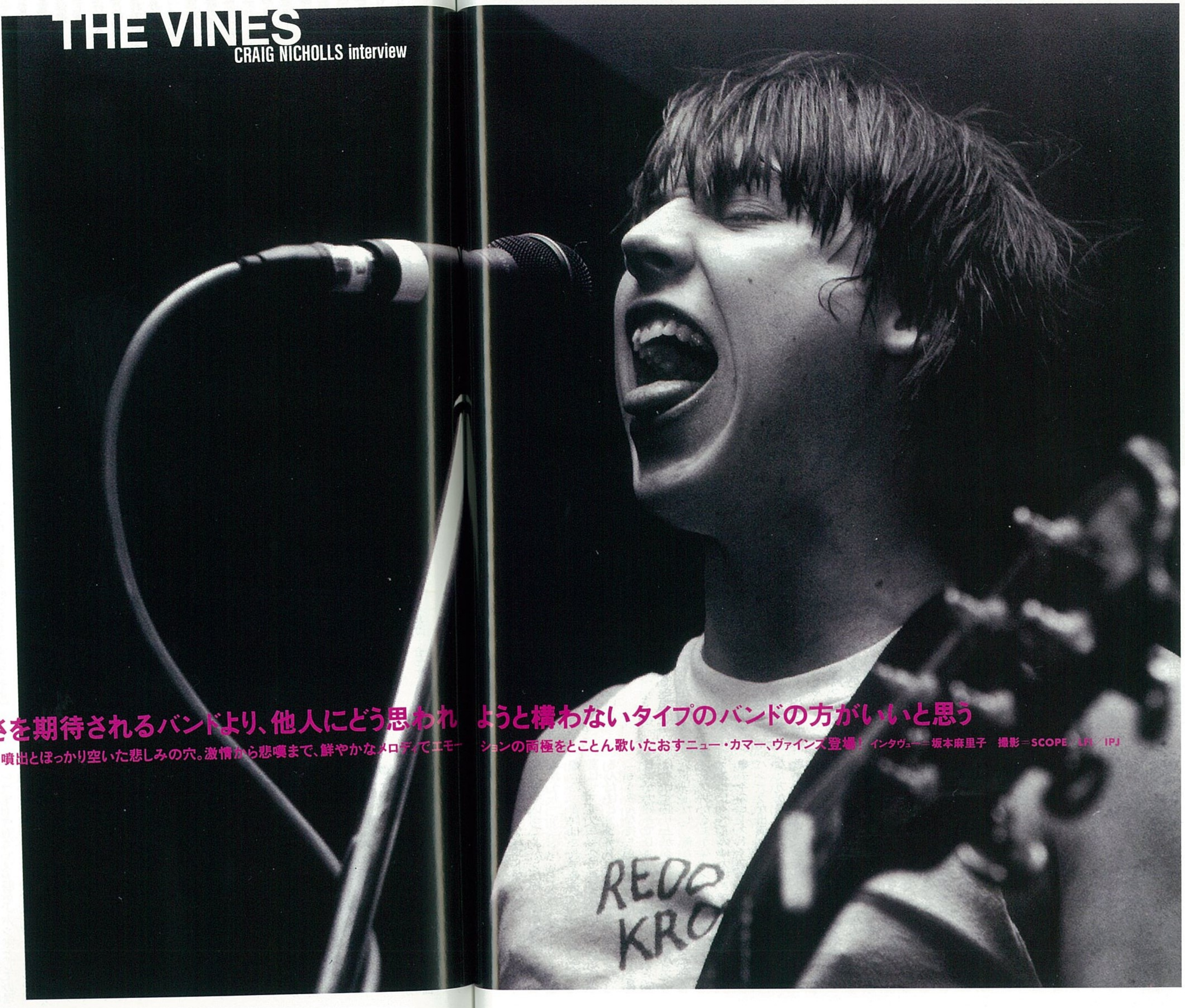
THE VINES
CRAIG NICHOLLS interview



いつも完璧さを期待されるバンドより、他人にどう思われようと構わないタイプのバンドの方がいいと思う

制御不能なエナジーの噴出とぽっかり空いた悲しみの穴。激情から悲嘆まで、鮮やかなメロディでエモーションの両極をとことん歌いたおすニュー・カマー、ヴァインズ登場！ インタヴュー＝坂本麻里子　撮影＝SCOPE／LFI／IPJ

24歳のソングライター／ギタリスト／シンガーであるクレイグ・ニコルズを中心にシドニーで結成されたヴァインズ。春からNMEが騒ぎ始めたちまち話題のバンドになってしまったが、無駄を省いたざっくりしたギター・サウンドのドライヴとポップなメロディのパワー、そのふたつぽっきりで成り立っているシングル〝HIGHLY EVOLVED〟の潔さは確かに衝撃だった。いや、それ以上に衝撃だったのはクレイグの声だ。不満と不遜、若い苛立ちで溢れかえっているのに、本質的なピュアさは損なわれず透き通ったまんまの歌声。熱さと覚醒が素のままで同居している彼の中の不思議な距離感はデビュー・アルバム『ハイリー・イヴォルヴド』で一層くっきりしたコントラストを見せている。中期ビートルズを思わせる美しい曲では多重録音やメロトロンを施した幻想的な音の中を浮遊し、一転咽喉が破れんばかりの咆哮でガレージ・チューンが爆裂。静と動の両極を激しく行き来し字余り気味の過剰なエモーションがほとばしる様に、ロックの初期衝動が熱く刻印されているのを久々に感じた。この原石の輝きをあなたの手で耳で掘り起こして欲しい。

●アルバム『ハイリー・イヴォルヴド』、本当に素晴らしいと思います。メロディは親しみやすくポップだけれどサウンドはロックの荒削りなエナジーにあふれていて、そのコントラストが鮮やかだしフレッシュだと感じました。

「本当？　ありがとう。とても嬉しいよ」

●昨年シドニーのマネージメント会社と契約するまでホーム・レコーディングを中心に活動していたということですが、このアルバムを作ることは長い間思い描いてきた夢がかなったようなものなんじゃないかと思います。思っていた通りの作品に仕上がったと思いますか？

「うん。原始的でありながら先進的でもあって、パワフルでありながら穏やかでもあり、その両端の間にいろんなレベルのエモーションもある。スタイル的にも豊富だしね。よくできてると思うよ。様々な個性のある曲を集めたアルバムになるってことは制作段階から感じてた。それぞれの曲のキャラクターを強めるように、努力したんだよ。メロディックなアルバムにしたいって最初から思ってたからね。うん、結果にはすごく満足してる」

●あなたが最初にギターを弾き始めて、曲を作り始めた頃を覚えてますか？

「その頃、とにかく退屈だったね。バンドを始めたのは、音楽に対するヴィジョンがあったってことの他に、すごく退屈だった、っていう理由もあるんだよね。物事はゆっくり進んでいったんで、実際にレコーディングするようになるずっと前から、ぼくは音楽をやってたんだ。自分で曲作りするようになる前からね。曲作りもゆっくりしたペースで、ヴァースを作った何週間も後でコーラス部分ができたりする。逆に、曲全体を10分で書いちゃうってこともあるけどね。それはその時その時で違うんだけど、曲作りっていうのはいつでもエキサイティングだよ。いろんな可能性を感じるからね」

●あなたの唱法やギター・サウンド、そして本質的なポップさからは、カート・コバーンの影響を強く感じるんですが――。

「そう、彼にはかなり影響されてる。その通りだよ」

●で、ふと思ったんです。『ハイリー・イヴォルヴド』はロブ・シュナップ（※ベックの作品を手掛けたことで有名）という才能も経験も豊かなプロデューサーの助けを借りたいい意味で洗練されたもので、バンドのいいイントロダクション作になったと思うんですが、逆に今のあなたは『イン・ユーテロ』のような、ソリッドでそぎおとされたプロダクションの作品を作りたいって思っているんじゃないかな？と。

「次のアルバムのプロダクションは、さらに過激で強調されたものにしたいと思ってるんだ。たとえばギターとヴォーカルだけの曲があったり、もっと多重に録音したギターでがんがんロックンロールをやったり、エレクトロニカ的なパーカッションやブレイクなんかの要素を取り入れたり。歌ものらしさをキープして、ヴォーカルは多く入れたいけどね。ぼくらにとって歌は重要だから、歌が中心になることは変わらない。セカンド・アルバム用の曲はもう既にできてて、歌詞もアレンジも決まってるよ」

●えっ、もう？

「うん。だから今は次のアルバムの新曲が頭から離れないんだよ。真剣に考えてて。バンドが注目されたことを、本当にありがたく思ってるんだよね。プレッシャーは感じてないけど、バンドに自信がついたっていう部分はあるんだよね。デビュー・アルバムの制作には2～3年かかってしまったけど、今は『いい曲を早く、たくさん作らなきゃ』って思いが強い。だから、早い段階で注目を浴びたってことはぼくらにとってポジティヴに作用してて、とにかく前進しようって気持ちにさせてくれるんだ。新しい曲は、まだ人前でプレイしたことない曲も含めて、たーくさんできてるよ」

●さっきも言いましたが、ヴァインズの音楽の中には相反する極端な要素があって、たとえばビートルズやキンクスのようなブリット・ポップのオリジナル・ジェネレーションのメロディ・センスと、90年代以降のオルタナティヴ・バンドのダイナミックなギター・サウンドがブレンドされたものと言えますよね。

「それはいい表現だと思う。合ってるよ」

●なぜどちらか一方を追求するのではなく、そのふたつを結び付けようとしたのですか？

「でも全部やりたかったんだ」

●そっか（笑）。

「できる限り欲張ってね。ぼくらはいろんなタイプの音楽が好きだから。ヘヴィ・メタルだけとか、ビートルズ・オンリーとか、カントリー・ロック最高！とか、そういう音楽の聴き方はしてこなかった。いろんな影響を受けてきたわけだから、それを全部取り入れた方が刺激的だと個人的には思うんだけどな。大切なのは歌詞とメロディとアレンジであって、雰囲気的なものじゃない。バンドのサウンドは重要じゃない、ってわけではないんだけど、バンドとしての理想の方が重要なんだよ。どんなヴォーカルで、どんなスタイルをミックスさせて……っていう。そういうことを全部ひっくるめて、ひとつのアート作品になるんだと思う。たとえば絵を描く時、正反対の要素を対比させて強調するっていう方法があるんだけど、そんな感じかな。特にメロディが大好きなんだ。いつも頭の中でハミングしてるよ。でも、時にはハメを外して、スクリームするヴォーカルとダーティーなギターを爆音で聴かせるアレンジで演奏すると気持ちいいんだよね。作る時も興奮するけど、聴き返す時も興奮するし」

●爆発するようなエナジーや怒り、フラストレーションがあなたのヴォーカルやギターにありますが、一方でドリーミィでサイケデリックかつシュールな味のある曲には、疲労感や醒めた感覚、諦めさえ感じます。アルバムを聴いているとあなたって分裂症じゃないか？なんて――。

「そうそう、それは当たってる」

●（笑）。もちろん、いい意味でですよ。

「音楽的な意味でね。その通りだと思う。自分たちの中のあらゆる面を表現したいんだよ。曲

を作ってるのはぼくだから、当然、ぼくのパーソナリティが出てきてしまうんだよね。ぼくには昼と夜みたいに両極端のものがあって、それが音楽に反映されてる」

●若者の感覚と成熟した老人の感覚、その両方を持っているんじゃ？なんて気にさえなるほどなんですけど、あなたの中にはそういった異なるいくつものパーソナリティがあるってことですか。

「ああ、それはあるよ。いろんなミックス。詩人なのかなあ。あるいは緩衝地帯」

●（笑）。音楽はその衝突を解消する役割を持っていたりする？

「ん――……そうかもね。ソングライティングを始めたら、何でも好きなことを歌にできるんだ、と気づいてね。そのことがなんだか自分の性格に合ってたんだ。これだ、と思った。音楽のことで頭を一杯にすることができたし、ちょうどよかったんだよね。ずっと音楽が好きだったし、歌うのは前から得意だった。音楽のことに身を入れて考えるようになったら、強烈な歌がたくさんあふれ出てきたんだ。時にはシリアスに、感受性豊かでスピリチュアルな歌を歌うこともできるし、時には死ぬほど叫びまくれる。音楽の世界は何でもありで、自由だから」

●音楽がなかったら、あなたはもっと混乱したパーソナリティだったかもしれないと思いますか？

「いやあ、どっちにしても混乱してると思うけど。まあ、もっと混乱してたかもしれないことは確かだね」

●アルバムのアートワークは、あなたの手によるものですよね？

「そうだよ」

●ああいうものも、あなたにとって自己表現の手段のひとつなのではないですか？

「そう、それを今言おうとしたんだけど、絵を描くこともすごく自分のためになってってね。音楽をやってなかったら絵を描いてると思うな。もっと若い頃はそれをメインにやろうかとも考えてたんだ。あといくつかアルバムを作ったら、また本格的に絵の方をやりたい。家全体にペイントしてみたい」

●（笑）。庭園が描かれていますよね。

「そう。木と花々があって、背景に夕日があって」

●庭園のイメージで何を表現したかったんだと思います？

「たとえば〝オータム・シェイド〟や〝カントリーヤード〟なんかのメロウな曲を連想させるんじゃないかな。ずいぶん時間をかけて描いた絵なんだけど、アルバムのイメージでもあったんだよね。なんかこう、安全で平穏で美しい世界。描かれてるのは木々と、いろんな色、空、植物だけでね。動物や人間や、人工的な物体は何もない。一種の現実逃避的なものかな。安全地帯というか」

●じゃあ、快適な繭みたいなものでしょうか。

「そうそう」

●歌詞についても同じことを感じますよね。あなたの描く世界って、本質的には疎外感や現実からの逃避を歌ったものだと思います。こういったモチーフは何からインスパイアされて生まれるのですか？

「さっききみが言った通り、歌は自分の中の混乱を解消して、癒す役割があると思うんだ。感情をすべて音楽で解放することと、音楽に没頭することでね。頭の中で考えた後、物理的な制作作業を経ることになるから心身ともに疲れるんだけど、満足感が得られるんだ。今のは作る側の話だけど、聴く側にもあると思う。ぼくの場合、ソングライティングがあまりにも好きだから、エナジーをそこに集中できるんだ。基本的にひとりで書いてるわけだしね。誇張してある歌詞もあるけど、それは効果的なストーリーにするために真実を膨らませたものであって。その方がいい歌になるっていう場合はね。歌ってた時に語感がいい言葉に変えてしまうこともあるし。うん、確かに疎外感とか孤独を歌ってることは多いかもしれない。でも、ハッピーな感じの曲もあるよ。皮肉っぽいのもあるし、やんちゃなのもある。全体としては、真実を語ってるんだけれども、そこに手を入れてフィクションになってる部分もあるってこと」

●それを聞いてちょっとほっとしました。歌詞から、あなたって少し塞ぎがちなんじゃないかと想像していて。

「そうだね、軽い鬱病的な要素は持ってると思う。でも、昨日は塞ぎ込んでたのに、今日は調子がいい、なんてこともあるしね。よくわかんないんだ。医者には怖いから行かないようにしてる。入院させられそうでさ」

●ひょっとしたら躁鬱の気が？

「いやいや（笑）。確かに感情の起伏は激しいけどね。完全な鬱病にはかかったことないよ。入院というのは冗談のつもりだったんだ（笑）」

●優れたミュージシャンやアーティストには感情のレンジが幅広い人が多いと思うんですが。

「ぼくの場合もそう。強烈なエモーションやアイデアのレンジが広いのかもしれない」

●そういった感情の起伏のようなものを元に芸術を生み出していくわけですから、アーティストというのは大変な仕事だと思います。

「でもぼくの場合は、過去の思いにこだわるより、前を向いて建設的に創造していきたい方なんだよね。既にある曲に加えて、新曲をレコーディングして、どんどん演奏していきたい。そして新曲の方は、今までよりアップビートなものにしていきたいと思ってるんだ。意識的に『こんな曲を書こう』と思って書くことはないけど、少なくとも、悲しい歌を作りたいと思ったことはないよ。そういう要素があるとすれば、実体験や脚色で紛れ込んできた部分なんだ。今のぼくは、すごくハッピーだからね。音楽を作ることを仕事にできてるんだからさ、なんとしてもポジティヴでいたいんだよ」

●でも、明日はどうなるかわからない？

「明日になればキレてたりしてね（笑）。もうこんな生活たくさんだ！みたいな」

●（笑）。実は、あなた方のライヴを一度観てるんですよ。

「本当？……ごめんね」

●（笑）。コーチェラ・フェスティヴァルでの演奏は観ていてちょっと異様な雰囲気でした。あなたは荒れてたし、すごく緊張してプレッシャーを感じていたのかな、と思ったんですが？

「やりたかった頃だから、ベストを尽くしたいとは思ってたよ。プレッシャーというのは別に感じなかった。いつも完璧を期待されるバンドより、他人にどう思われようと構わないタイプのバンドの方がいいと思うしね。ライヴの出来を保証できるところまでは、まだいってないんだ。でも、ぼくらの音楽が気に入ったというのでも、どんなバンドか観てみたいというのでもいいから、観に来て欲しい。できればポジティヴに受け止めて欲しい。ぼくらにできることは、自分たちの音楽を聴かせること、バンドとしての自分たちを見せることだけだから。どう言われようと影響されることはないよ。それと、ステージでのぼくの振舞いは毎回違う。その日の気分でパフォーマンスが変わるんだ」

●あなたってステージ上では狂人のようになるひとなんだなあと思いました。

「確かにそうかも（笑）」